ポスター | 1-16 肺循環・肺高血圧・呼吸器疾患

ポスター

肺高血圧　病態

座長:塚野 真也 (新潟県立新発田病院)
2015年7月17日(金) 14:20 ～ 14:50 ポスター会場 (1F オリオン A+B)
II-P-127～II-P-131
所属正式名称：塚野真也(新潟県立新発田病院　小児科)

[II-P-130]先天性心疾患患児における平均血小板容積と肺高血圧症の関連についての検討

○森下 祐馬, 糸井 利幸, 濱岡 建城 (京都府立医科大学大学院医学研究科　小児循環器腎臓学)

キーワード：平均血小板容積, 肺高血圧症, 先天性心疾患

【背景】平均血小板容積(MPV)は血小板機能を評価する簡便な指標で、新生血小板は容積が大きく凝集能が高い。肺高血圧(PAH)症例では微小血栓形成により MPVが高値となるが、先天性心疾患での検討は少ない。【目的】先天性心疾患での MPVと PAHの関連を検討すること。【方法】2010年1月～2013年12月に心臓カテーテル検査を行った非チアノーゼ性二心室先天性心疾患で平均肺動脈圧(mPAP)の測定を行っている218症例において、mPAPなど複数項目について MPVとの関連性を後方視的に検討した。【結果】 mPAP＜25mmHgの147症例における年齢間(＜1歳、1～5歳、6歳≦)の検討では、6歳≦で MPVが有意に高値で(8.84±0.71fl,9.00±0.65fl,9.76±0.94fl)、非 PAHにおいても MPVに年齢差を認めた。6歳≦では PAH例が少数のため、＜1歳、1～5歳の各群で mPAPを基に四分割し、下位25%と上位25%を比較検討した。＜1歳(59症例)の検討では、上位25%(n=15,mPAP最小値54mmHg,最大値78mmHg,中央値60mmHg)で下位25%(n=15,mPAP最小値7mmHg,最大値24mmHg,中央値18mmHg)より MPVが有意に高値であった(9.39±0.51flvs8.84±0.71fl,p=0.02)。1～5歳(89症例)の検討では、上位25%(n=22,mPAP最小値25mmHg,最大値70mmHg,中央値32mmHg)と下位25%(n=22,mPAP最小値10mmHg,最大値15mmHg,中央値14mmHg)で MPVに有意な差を認めなかった（9.39±1.37flvs9.01±0.42fl,p=0.19）。【考察】 PAHでは内皮機能障害により血液凝固や血栓溶解作用が異常をきたし、血小板凝集及び血小板の消費と産生が亢進する。1～5歳で MPVの有意な差を認めなかったのは、加齢による MPVの増加と上位25%内において mPAPのばらつきが大きかったことによる影響と思われた。一方、＜1歳の上位25%の PAH症例では MPVが有意に高値であり、先天性心疾患の乳児期 PAH症例では血栓形成の活性亢進が示唆された。【まとめ】先天性心疾患の乳児期 PAHでは血栓形成促進の指標である MPVが高値であった。

©特定非営利活動法人 日本小児循環器学会